様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０１６１１

研究課題名（和文）自然体験療法における発達障害児の社会性支援プログラムの構築

研究課題名（英文）Development of a social support program for children with developmental disabilities in outdoor experiential therapy

研究代表者
坂本　昭裕（Sakamoto, Akihiro）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：１０２５１０７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、自然体験療法に参加した発達障害児の社会性を改善するための効果的なプログラムを検討することであった。縦走登山などの冒険的プログラムとキャンプ生活を含む15日間の自然体験療法プログラムは、発達障害児の対他性意識や社会的スキルなどの社会性を改善することが明らかになった。また、プログラムの治療的要因は、発達障害児が示す葛藤を冒険的プログラムを通じて解決に向けて取り組む実存的体験であった。また、治療的プロセスを可能にするプログラムの構成要素は、アセスメント、構造化プログラム、リスクを伴う自然体験活動、グループ、プログラムにおける他者との共体験が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで自然体験療法プログラムにおける発達障害児の社会性の改善に関してエビデンスが存在しなかった。しかし、本研究においてエビデンスが示されたことは、体育学や臨床心理学の領域において学術的な意義がある。またプログラムの治療的要因やプログラムの要点となる構成要素が明らかになったことは、実践現場での臨床的指針として役立つと思われる。そしてこのようなプログラムが、発達障害児の社会性などの成長を支援する取り組みとして認知される社会的意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine an effective program to improve the social skills of children with developmental disabilities who participated in outdoor experiential therapy. A 15-day outdoor experiential therapy program that included an adventure based program, mountaineering and camping improved social skills such as interpersonal awareness and social skills in children with developmental disabilities. In addition, the therapeutic factor of the program was the existential experience of working to resolve the conflicts exhibited by children with developmental disabilities through an adventure program. Program components that enable the therapeutic process were identified as assessments, structured programs, outdoor activities with risk, groups, and co-experience in programs.

研究分野：野外教育学　体育学　臨床心理学

キーワード：自然体験療法　発達障害　社会性　キャンプ　冒険プログラム　カウンセリング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

発達障害児の中核的な障害特性は、社会性に困難を示すことにある。社会性の障害とは、１）非言語的行動の理解と表出の困難、２）友人関係構築の困難、３）対人・情緒的相互性の欠如が指摘されている。そのため発達障害児は、集団内不適応や対人的な問題が生じやすく、いじめ、不登校などの二次的障害につながりやすい。したがって、発達障害児に対する支援策を講ずることは、わが国の教育における喫緊の課題となっている。自然体験療法（Outdoor Experiential Therapy）は、キャンプによる生活体験やアウトドアアクティビティ等のスポーツ体験を通して、クライエントの問題を改善し発育発達を支援するプログラムである。自然体験療法では、小集団での構造化されたカウンセリングに特徴があり、クライエントの自己意識の変容や人間関係などの社会的能力を育むことに有効であると言われている。したがって、発達障害児を対象に自然体験療法を実践し、発達障害児の中核的な問題である社会性に及ぼす影響について検討することが急務となっている。

２．研究の目的

本研究では、自然体験療法における発達障害児童・生徒の社会性に及ぼす効果について検討する。また、発達障害児童・生徒の社会性を改善する治療的要因について検討し社会性を獲得するプロセスについて明らかにすることが目的である。この目的を達成するために、以下の３つの研究課題を設けた。

研究１:発達障害児の社会性に及ぼす効果

発達障害児の社会性の障害への効果について質問紙法を用いて明らかにする。

研究２:発達障害児の社会性の改善に関わる治療的要因の検討

自然体験療法プログラムにおける発達障害児が社会性を改善する治療的要因について事例研究から質的に検討する。

研究３:発達障害児の社会性獲得プロセスの検討

自然体験療法プログラムにおける社会性の獲得プロセスを事例研究から検証し治療的モデルを作成する。

３．研究の方法

〔研究１〕

調査対象者：2015 年から 2019 年までにプログラムに参加した小学校 5 年生から中学校 3 年生までの発達障害児童・生徒 20 名及び定型発達児童・生徒 66 名の合計 86 名を対象とした。

調査内容：平石[1)] の青年期用の自己肯定意識尺度を参考に黒田[2)] が児童・生徒用に改変作成した児童生徒用自己肯定尺度及び戸ヶ崎･坂野[3)]による社会的スキル尺度を用いて調査を行った。

手続き：2015 年から 2019 年の 5 ヵ年に渡って、国立の社会教育施設が主催する 15 日間（事前プログラム、メインプログラム含む）の自然体験療法プログラムを実施し、プログラム前後及び 1 カ月後に質問紙を配布し回答を求めた。

プログラムの概要：プログラムは、事前プログラム（1 泊 2 日）とメインプログラム（12 泊 13 日）からなる 15 日間のプログラムであった。事前プログラムでは、ガイダンスの他、軽登山、キャンプに関する生活技術を習得するためのプログラム、アセスメントが実施された。メインプログラムは、トレイルを縦走する登山（8 日間）をメインとするアドベンチャー型のプログラムであった。プログラム中の生活は、2 日間の宿舎泊を除きすべてテント生活であった。

〔研究２・3〕

調査対象者：2015 年～2019 年までにプログラムに参加した小学校 5 年生から中学校 3 年生発達障害児のうち顕著に社会性に改善が認められた者 5 名

調査内容：事前プログラム及びメインプログラム中における対象児の行動及び活動中の発話データを収集した。また、事前事後における面接における対象児の語り及び中井（1969）による風景構成法による描画データを収集した。

手続き：プログラム中にける対象児の行動や発話データは、グループの担当カウンセラーに観察・記録を依頼し、当日の夜に記入を求めた。また、事前事後の面接データ及び描画データは、研究者が面接を実施した。

４．研究成果

（1）発達障害児の社会性に及ぼす効果

自然体験療法プログラムに参加した発達障害児童・生徒の社会性に及ぼす効果を検討するために、自己肯定意識尺度の対他者領域についてプログラム前（Pre）、プログラム直後（Post１）、プログラム１カ月後（Post2）に回答を求めデータを分析した。その結果、発達障害群は、定型発達群との交互作用は認められなかったが、群及び時期について主効果が認められた（表 1）。すなわち、社会性に関わる対他者領域の得点では、定型発達群より、得点は低いものの、プログラムによって、社会性に関わる意識の向上が認められた。対他者領域には、人間不信、対人積極性、対人緊張の３つの下位次元があり、いずれもプログラムの効果が認められた。特に対人積極性の次元においては、交互作用が認められ、キャンプ１カ月後において、プログラム前及びプロ

表1　発達障害群と定型発達群の自己肯定尺度得点の比較

		Pre		Post 1		Post2		群	時期	交互作用	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD				
全体	発達障害群[a]	94.50	18.62	98.80	19.15	105.71	19.43	20.05**	27.45**	3.13*	Pre＜Post2 Post1＜Post2
	定型発達群[b]	107.54	14.61	119.97	14.21	120.81	16.32				Pre＜Post1,Post2
対自己領域	発達障害群	55.65	12.27	58.44	13.36	61.29	12.35	15.29**	18.87**	2.93†	Pre<Post2
	定型発達群	62.33	9.39	70.73	9.45	70.09	10.58				Pre＜Post1,Post2
対他者領域	発達障害群	38.85	8.33	40.35	7.87	44.43	7.73	20.88**	23.98** Pre<Post1,Post2 Post1<Post2	1.71	
	定型発達群	45.21	6.57	49.24	6.76	50.72	6.92				

Pre:事前　Post1：プログラム直後　Post2：プログラム1カ月後　[a]n=20　[b]n=66　†p<.10　*p<.05　**p<.01

グラム直後よりも有意に得点が高くなった。発達障害児の社会性に関する意識は、プログラム後日常生活に戻ってから向上することが窺われた。

次に、発達障害児童・生徒の社会的スキルに及ぼす影響について、社会的スキル尺度得点について、プログラム前、プログラム直後、プログラム１カ月後の比較から検討した（表 2)。

表2　発達障害群と定型発達群の社会的スキル得点の比較

		Pre		Post 1		Post2		群	時期	交互作用
		M	SD	M	SD	M	SD			
関係向上	発達障害群	19.94	4.34	21.69	5.49	23.02	4.23	9.70**	12.84** Pre<Post1,Post2	0.79
	定型発達群	23.14	3.71	24.81	3.34	25.08	2.99			
関係維持	発達障害群	22.77	4.65	22.25	4.84	23.45	4.03	11.07**	2.55†	1.09
	定型発達群	25.11	2.73	25.63	2.82	25.93	2.64			
関係参加	発達障害群	17.99	5.26	21.69	5.89	23.10	4.61	10.59**	27.88** Pre<Post1,Post2	2.01
	定型発達群	22.40	3.47	24.98	3.47	25.26	3.47			

Pre:事前　Post1：プログラム直後　Post2：プログラム1カ月後　[a]n=16　[b]n=54　†p<.10　*p<.05　**p<.01

その結果、発達障害群は、定型発達群との交互作用は認められなかったが、群と時期の主効果が認められた。発達障害群は、定型発達群に比較して、有意に社会的スキル得点が低い。しかしながら､自然体験療法プログラムを通じて､社会的スキル得点が向上することが明らかとなった。社会的スキルのうち、関係参加に関わるスキル、次いで関係向上に関するスキルが高まることが明らかになった。

（2）発達障害児童・生徒の社会性の改善に関わる治療的要因

プログラムに参加した発達障害児のうち、社会性が顕著に改善されたと思われる児童生徒を 5 名抽出し事例研究から治療的要因について検討した。ここでは１事例（事例 A）を取り上げ報告する。

【事例】

事例 A は、プログラム前半では奇声をあげたり、班員に対して「後ろ早く来い。」(2 日目）などの自己中心的な発言が目立っていた。また、異性の班員に人目をはばからず、好意を顕わにする(３日目)など、他の者がそのことをどう見るかという意識の弱さが窺われた。山登りでは、キャンプ序盤では足の痛みに耐えきれず、下りの際に後ろ向きで歩き、そのことについて否定的な発言を班員から受けていた。当初、このような意見を受け入れることが出来ず、反発することが多かった。しかし、A は、反発しながらも、「申し訳ないと思ってる！」(3 日目)と言うなど、自分の行動がよくないことと理解し、行動に示すことができない自分に葛藤していた（①)。しかし、班員の肯定的な言葉かけや気遣いなど自分が認められる場面（②）もあり、また班員に荷造りを手伝ってもらうなど生活面でのサポートなどから、徐々に班員との信頼関係（③）が築かれていったように思われる。他者からの否定的な意見も、信頼関係が出来上がっていく（④）のと比例して受け入れることができるようになっていったと考えられる。

カウンセラーは班員の A に対する否定的な発言がいき過ぎないように留意していた。学校生活では担任あるいは、クラスメイトから指導あるいは叱責されるような体験をしばしばしていたことが推測され、抑圧的、防衛的な面が強化されてきていたのではないかと推測される。しかし、キャンプではカウンセラーが A を守る（⑤）ことによって、過度な否定的な意見による心理的な脱落を防ぐ（⑥）ことができたものと思われる。

キャンプ後半では、奇声を発しなくなり、また下りを歩く際にも後ろを向かなくなる(９日目)など大きな変化がみられた。変化のきっかけとなるような大きな出来事があったわけではなく、班員からの度重なるかかわりによって内省、葛藤し徐々に変化してきたのではないかと思われ

る。初めは足の痛みに耐えきれず、登山中は後ろ向きで歩いていたが、ポールという支えを使い始め、その支えも最初はうまく扱えなかったが、徐々に自分の体重をうまくポールで支えながら、最後は自分の足で前に進んでいた（⑦）。そういった姿が象徴するかのように、キャンプ生活への適応が山歩きの様子の変化にも表れていたように思われる。

図１　風景構成法（プログラム前）

図２　風景構成法（キャンプ後）

風景構成法による描画では、キャンプによって、A が抱えていた抑圧感あるいは防衛的態度の変化が窺われた。また、山の前景には、道路、家、人、動物が描かれ、図１に比較すると、それぞれのアイテムの距離も近くなり、つながりを連想させる描画となっている。このことは、キャンプのグループのメンバーやカウンセラーからの被受容感による、対人的な不安の軽減を示しているように思われ、A の社会性の改善が認められた。

本事例及び他 4 例の事例の検討から、共通して抽出された治療的要因は、自分の問題行動を指摘されて①葛藤する体験、②受容される体験、③認められる体験、④信頼関係形成、⑤キャンプカウンセラーの守り、⑥心理的脱落を防ぐ、⑦登山で歩くなどの身体活動であった。

（3）発達障害児の社会性獲得プロセスの検証

キャンプに参加した発達障害児童・生徒の事例研究から、発達障害児がプログラムの中で社会性を獲得する心的プロセスとして以下のモデルが生成された。

発達障害児は、日常的に表出している問題行動をプログラムの中でも反復的に示す、①不適応的な自己の段階を契機に、問題行動をめぐるキャンプのグループ集団内の葛藤が生じる。このことによって、自己と他者の意識が高まる②他者意識生起の段階、③自己意識が高まり自分自身の感情や考えに目を向ける段階となる。

そして、他者との関係や対処の方法をカウンセラーのサポートを得ながら、④対処行動あるいは適応行動の試みの段階へと進展する。さらに、プログラムを通じて起こるエピソードを繰り返しながら、集団内の他者と折り合いをつけるようになる。すなわち、⑤前適応的自己の段階を経て、さらに他者との相互浸透的なコミュニケーションが行われるようになり、⑥キャンプのグループ集団内における社会的な自己の段階へと至ることが示された。このような発達障害児童生徒のプロセスを可能にするプログラム構築の要点として、体験活動を活用したアセスメント、構造化されたプログラム、リスクを伴う自然体験活動（実存的体験）、グループ集団、プログラムにおける共体験が明らかにされた。

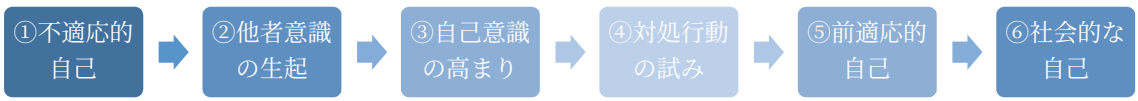

図１　発達障害児の社会性獲得プロセス

＜引用文献＞
１）平石賢二：青年期における自己意識の発達に関する研究（I）－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討－，名古屋大学教育学部紀要．37，217‐234，1990.
２）加藤拓史：統合型キャンプが不登校児童生徒の自己イメージに与える影響-受容感との関連からの検討-，筑波大学修士論文，2013.
３）戸ヶ崎 泰子，坂野 雄二：母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響－積極的拒否型の養育態度の観点から－，教育心理学研究 45（2），173‐182，1997.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 吉松　梓　坂本昭裕	４．巻 63
２．論文標題 冒険教育プログラムを導入した長期キャンプにおける不登校生徒の身体性回復のプロセス	５．発行年 2018年
３．雑誌名 体育学研究	６．最初と最後の頁 811-826
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹内靖子　坂本昭裕	４．巻 22
２．論文標題 相互成長の場としての発達障害児キャンプ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 野外教育研究	６．最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 向後佑香　坂本昭裕	４．巻 21
２．論文標題 わが国のキャンプにおける自己成長性の変容－メタ分析を用いた統合的評価－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 野外教育研究	６．最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大友あかね　坂本昭裕	４．巻 21
２．論文標題 長期キャンプにおける心理的課題を抱える児童生徒の社会適応に関する研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 野外教育研究	６．最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 坂本昭裕　渡邉 仁　吉松 梓　大友あかね
2．発表標題 野外教育における心理臨床的アプローチ -描画法＜風景構成法＞を学ぶ
3．学会等名 日本野外教育学会第22回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 坂本昭裕
2．発表標題 冒険プログラムの心理臨床的効果－セラピーキャンプが子どもたちにもたらす効果－
3．学会等名 日本OBS30周年事業冒険教育入門
4．発表年 2019年

1．発表者名 坂本昭裕　渡邉　仁　竹内靖子　吉松　梓　向後佑香　坂谷　充
2．発表標題 野外教育における心理臨床的アプローチ-発達障害の子どもとその保護者が参加するキャンプの事例から-
3．学会等名 日本野外教育学会第21回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 坂本昭裕　杉岡品子　吉松　梓　寺中祥吾
2．発表標題 事例研究-野外教育における実践の知の創出-
3．学会等名 日本野外教育学会第21回大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 吉松　梓　坂本昭裕
２．発表標題 冒険教育プログラムにおける不登校生徒の身体性回復のプロセス
３．学会等名 日本野外教育学会第20回記念大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 坂本昭裕・大友あかね・渡辺　仁・吉松　梓・向後佑香・坂谷　充
２．発表標題 発達障害の子どもの社会化と個性化
３．学会等名 日本野外教育学会第19回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 大友あかね・坂本昭裕・坂谷　充
２．発表標題 長期キャンプにおける課題を抱える児童生徒の社会適応に関する研究
３．学会等名 日本野外教育学会第19回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yasuko Takeuch, Kenta Nakano, Akihiro Sakamoto, Kanji Tsuru, Yasunori Ishida
２．発表標題 Kids' Family Camp as a Life-changing Experience for Children with or without development disabilites, Family, & Staff
３．学会等名 The 6th Asia Oceania Camping Congress.（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

1．著者名 坂本昭裕	4．発行年 2017年
2．出版社 杏林書院	5．総ページ数 246
3．書名 野外教育研究法	

1．著者名 坂本昭裕	4．発行年 2018年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 161
3．書名 スポーツ心理学	

1．著者名 坂本昭裕	4．発行年 2016年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 206
3．書名 情動と運動－スポーツとこころー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡邉　仁 (Watanabe Hitoshi) (70375476)	筑波大学・体育系・助教 (12102)	